

自然観察会
 晩秋の奈良公園紅葉狩り

富江 文雄

11月22日(火)近鉄奈良駅前の行基菩薩像前に11人が集合。濃霧による電車遅延の影響もあり9:15に出発。講師は千載さんで、歴史的なお話を交えての観察会となった。



北円堂付近から観察会を開始。興福寺は藤原不比等が氏寺として建立した寺院で、外京の高台から平城宮を見下ろす位置にあり、往時の勢力が偲ばれる。飛鳥寺様式とされる三金堂を擁していたが、現在は2019年に再建された中金堂と室町時代再建の東金堂と二つの金堂のみである。再建予定のない西金堂跡には修二会で奉納した猿楽座が能の源であることを示す能楽金春発祥の地という石碑が建っている。近くの大きな松に数個の‘マツグミ’が見える。寄生植物であるヤドリギの一種で宿主から栄養分を得ており松には負担が大きい。クスノキの枝に着いている‘ノキシノブ’は着生植物で宿主の負担にはならない。

京都とを結ぶ奈良街道沿いに南都八景の一つにもある‘雲井坂’の石碑がある。昔はかなりの坂道で荷車を押すには大変苦勞したよう



ある。その西に一里塚、東大寺西大門跡があり、周辺にはイチイガシ、エノキ、ケヤキなどの大木が茂っている。中でも、この時期に存在感を発揮しているのはイチョウの大木である。美しい黄

葉を大きく広げ、樹下には黄色の絨毯を一面に敷き詰めている。イロハモミジの赤やエノキの黄色とも融合してとても美しい。

戒壇院に52段の階段を登る。52段は菩薩から如来への修行の段階を表しており、私たちは菩薩(人間界)から如来(天界)に上ったことになる。裏手に回ると‘センダン’がまだ少し実を付けていた。2月末にかけて練行衆がお水取りの準備する別火坊を過ぎた右側に‘ヒイラギ’の古木の白い花が満開であった。古木になると葉は棘がなく丸くなる。私たちも少しは丸くなっているのかな。

大仏池の西側からの風景は奈良景観資産の一つであり、

モミジの赤、イチョウの黄に加えて大仏殿が水面に映え、そこにカモが泳ぐ様は一幅の絵になる。



二月堂の方に登って行く途中の‘大湯屋’の南側の池のほとりに‘マルバヤナギ’の雌木と雄木が向かい合っている。柳の雌木の存在は大変珍しい。5月に綿毛に包まれた種(柳絮)が飛び、池面を白く覆った景色も見ものだそう。柳絮が街では嫌われるので雌木がないのだろう。

二月堂の下にほとんど数メートルしか残っていない大木があった。‘ナギ’である。幹から推定1000年近い古木であろう。春日大社の神木であり1000年の歴史があると言われている。

法華堂(三月堂)には国宝で素晴らしい宝冠をかぶる不空羂索観音立像がおられ、本堂(北側半分)は創建当時のままであり、ぜひ機会があれば拝観すべきとのこと。

春日園地へ降り、最高の美しさを見せる川沿いを散策、最後は吉城川沿いの紅葉スポットで赤、黄、緑のグラデーションをなす晩秋を堪能。秋晴れにも恵まれ気持ちのいい観察会であった。